

公益社団法人 私立大学情報教育協会 英語教育・法律学・政治学・国際関係学・コミュニケーション関係学グループ 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会.
早稲田大学 12/23/2017

対話能力向上に向けて 評価基準を学生と共有し、 多面的な評価を行う取り組み

小泉 利恵 (Rie KOIZUMI) 順天堂大学

rkoizumi@juntendo.ac.jp 一部資料Webに掲載
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~koizumi/KoizumiHP.html>

概観

- 1. はじめに
- 2. 対話能力の現状
- 3. 授業での試み
 - 対話型活動
 - 活動の評価
- 4. 今後の課題



• イラストは以下から <http://www.irasutoya.com/>

1. はじめに

- 専門：言語テスト研究
- ペア・グループで、英語で議論を行う
- 思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性の中で、表現力を特に伸ばす
- ICTの活用：ICレコーダー (digital voice recorder) での録音・再生、ビデオ録画
- 評価方法：教員による評価、学生による自己・相互評価

コミュニケーション能力

(Celce-Murcia, 2007)

- 言語能力 (文法・語彙・発音等)
- 談話能力 (2文以上を理解・産出)
- 方略能力 (問題を解決、計画・評価)
- 社会文化的的能力 (状況に合わせた表現使用)
- 定型表現に関する能力
- 対話能力 (やり取りの中で言語でどう伝えるか。例: 会話を開始・終了する、相手と協力して会話を発展させる、説得する)

CEFRでの「やり取り」の記述例

- 欧州評議会による共通参照のための枠組み(Common European Framework of Reference for Languages; Council of Europe, 2001, 2017)
- 非公式な議論：B2：よく知った文脈で積極的に議論に参加できる。コメントし、意見を明確に述べ、別な提案を評価し、仮説を作って対応できる。B1：自分の信念・意見・賛成と反対を丁寧に述べられる
- 公式な議論：B2：型にはまった・はまっていない議論に積極的に参加できる。B1：自分の意見を明快に述べられるが、討論に参加することは難しい
- 次期学習指導要領から、外国語の領域に入る：聞くこと、読むこと、話すこと(やり取り)、話すこと(発表)、書くこと

学習者間のやり取り（インタラクション）の学習への利点（佐藤, 2017）

- 学んだ知識をアウトプットし、知識を修正する機会が増える。コミュニケーション能力の増進
 - コミュニケーションでの問題が起きた時に、フィードバックを受け、発話を修正しやすい
 - 最近接発達領域 (Zone of Proximal Development) において、足場かけ (scaffolding) を受け、学習が進みやすい
 - お互いを助け合う関係のあるグループでは協力的なやり取りが起こりやすく、学習が進みやすい

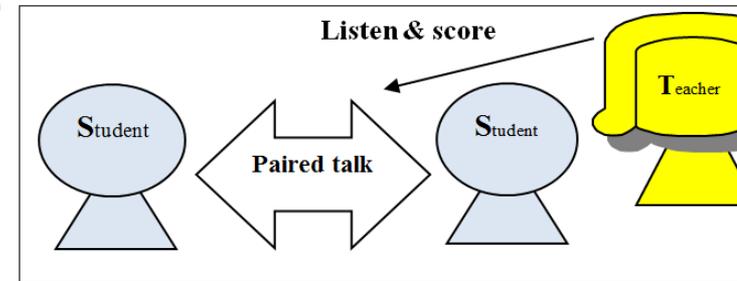
2. 対話能力の現状：日本語で

- 意見が違った時の対応 (2016年)
- 「なるべくことを荒立てないで収めたい」61.7% (増加傾向)、「納得がいくまで議論したい」24.9% (国語に関する世論調査、2017年9月22日読売新聞第13面)
- 分担を決めた後に、別な人が担当と異なる分野を調べたとき、注意を促す (正解：13.7%) より、褒める回答が多い (平均17.5%) (PISA・協同問題解決能力調査、15歳対象、2015年)

2. 対話能力の現状：英語で

(Koizumi, In' nami, & Fukazawa, 2017)

- ・ 日本人大学生に向けたペア型対話テスト (11個タスク。ロールプレイ・議論)
- ・ テストで使った機能を分析
 - 反対する15% 説得する10%
 - 会話を修復する19%
 - 相手の発言に関連して述べる17%
- ・ グループ活動をしていると対話（実質的な意見交換）が起こるように思えるが、そうでもない。意識的な指導・評価が必要



3. 授業での試み：対話型活動 1/6

- 工夫1：意図的に意見の対立を組み込む
- AとBという逆の立場の英文を読む・聞く
- 「～について話しなさい」
 - ある意見が出ると、他の学生は同意して終わってしまう。別意見を出すとしても、相手が言ったことにあまり触れずに自分の意見を述べるだけ
- ⇒「～について、1人がA、2～3人目がBの立場です。5分以内にAかBのどちらがよいかを話し合って決めなさい」
 - 説得・すりあわせが必要になる

3. 授業での試み：対話型活動 2/6

- 工夫2：対話で使える表現の使用を推奨する
- 表現を自然に使っている会話を聞く・読む。表現の確認・練習
 - Excuse me. What do you mean by “a few”?
 - Can you give me an example of ...?
 - Actually, I think you mean ...
 - I’m afraid I disagree because
- (時間があれば、事前でなく、課題を行った後に、表現確認する方がよい)

3. 授業での試み：対話型活動 3/6

- 2～3グループを作成
- 課題「～について、1人がA、2～3人目がBの立場です。5分以内にAかBのどちらがよいかを話し合って決めなさい。提示した表現を(できるだけ、1つ、または、3つ)使って話しなさい」
- 各グループにICレコーダーを渡して録音。名前を言ってスタート



3. 授業での試み：対話型活動 4/6

- 扱ったトピック例 (英語で内容も学びつつ、英語も学ぶ; 一部、Naganuma, Nagai, & O'Dwyer, 2015を改変)
- What do you do when you catch a cold? Do you think cold medicine is effective? Why/Why not?
- There are positive and negative points of social networking. Do you think it has more positive effects on our life? Why/Why not?
- What are the good and sustainable ways to do health practices while reducing the health risks these practices may cause? (hiking, swimming)
- Would you give or not give money to GiveDirectly considering its positive and negative aspects?

3. 授業での試み：対話型活動 5/6

- 活動中に、学生のやり取りを聞き、上手く
いっていない場合には助言
- 5分後に、AとBのどちらの結論になった
かとその理由を挙げる。良い論点・表現
の共有
- (自分の録音を聞きながら、会話を書きだ
す。参考になる議論の例を聞く)
- 使った表現や内容で、改善すべき点を修
正 (再度、別ペアで会話)

3. 授業での試み：対話型活動 6/6

- 結果：
- ○立場の割り当てによって、相手の発言に対して意見を述べるが増えた
- △すぐに妥協して相手に合わせる学生もいる。自分の立場の主張の時間と、その後の話し合いの時間に分ける方法はある
- △表現の提示だけでは議論方法が身に付かない。別なトピックで、ライティングも取り入れながら、繰り返し行う必要あり

3. 授業での試み：活動の評価 1/5

• 工夫1：評価基準(ルーブリック)を学生と共有

	タスク達成度	流暢さ	やりとりの自然さ
A (十分満足できる)	(X) 自分の考え・理由+詳細を十分に言えている。(Y) 相手と一致した考えになるように働きかけている。	長い沈黙がない。言い直しがあるが気にならない程度である。スムーズに話している。	交互に適切に話しながら、やりとりをしている。
B(おおむね満足できる)	(X) はできたが、(Y) はできていない。	長い沈黙が少しある。言い直しが多めで少し気になる程度である。話すスピードが遅めである。	やりとりをしているが、受け身のやりとりが多い。または自分一人で話すことが多くて会話を独占してしまっている。会話は続けようとしている。
C(努力を要する)	(X) も (Y) もできていない。	長い沈黙が多くある。言い直しが多し。話すスピードが遅く、理解に影響がある。	単純な反応をするだけで、やりとりを維持したり、発展させたりしていない。会話を不自然に止め、開始する努力もしていない。
自分の評価			
相手の評価			

3. 授業での試み：活動の評価 2/5

- 工夫1：評価基準を学生と共有
- CEFR B1: 身近な事柄の利点や欠点、問題の解決策について、個人的見解や意見を述べたり、尋ねたりすることができる
- Can-do & Goal
- 楽にできる✓ ✓ なんとかできる✓
- (Naganuma et al., 2015)

3. 授業での試み：活動の評価 3/5

- 工夫2：多面的な評価。
互いに共有、すりあわせ
- 自己評価・相互評価
- 教員による評価：
 - ①数グループを呼び出して会話を目の前で行わせる (直後にフィードバック)
 - ②授業での録音を、後で聞いて採点。結果返却



3. 授業での試み：活動の評価 4/5

- 工夫2：多面的な評価。互いに共有、すりあわせ
- 教員による評価：
- ③定期テストでペア型対話テスト実施（別室で実施。ビデオ録画。その場で採点。可能ならば直後にフィードバック。一部再度採点）
- 対話能力をより測れる形式。統制がゆるいために、対等な力関係での会話が引き出せる。一方で、他の受験者の性格などの要因の影響を受けやすい (Ockey & Li, 2015)

3. 授業での試み：活動の評価 5/5

- 結果：○自己・相互評価では、自分の発言と議論を振り返る機会になる。教員のフィードバックにより、気づいていない面に気づける
- ○ Can-do & Goal: 現在の位置と次の目標を認識できる
- △個別のフィードバックの回数は限られる。系統的に全員が定期的に、教員からのフィードバックを受けられるような計画が必要。録音を蓄積するポートフォリオの効果的活用が必要

4. まとめ

- ペア・グループで、英語で効果的な議論を行う (目標: 表現力を特に伸ばす)
- ICTの活用: ICレコーダー、ビデオ
- 指導上の工夫: 意図的に意見の対立を組み込む。対話で使える表現の使用を推奨する
- 評価上の工夫: 評価基準を学生と共有。多面的な評価を意図 (教員評価、自己・相互評価)

引用文献 1/2

- Celce-Murcia, M. (2007). Rethinking the role of communicative competence in language teaching. In E. Alcón Soler & M. P. Safont Jordà (Eds.), *Intercultural language use and language learning* (pp. 41-57). Heidelberg, Germany: Springer Netherlands.
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press. Retrieved from http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/source/framework_en.pdf
- Council of Europe. (2017). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment: Companion volume with new descriptors* (Provisional Edition). Strasbourg, France: Author. Retrieved from <https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/>

引用文献 2/2

- Koizumi, R., In'nami, Y., & Fukazawa, M. (2017, June). *Examining the construct of paired oral tasks through analysis of elicited speech functions*. Presented at the 4th International Conference of the Asian Association for Language Assessment (AALA), National Taiwan University, Taipei, Taiwan.
- Naganuma, N., Nagai, N., & O'Dwyer, F. (2015). *Connections to thinking in English: The CEFR-informed EAP textbook series: B1 (A2+) to B1+*. Asahi Press.
- Ockey, G., & Li, Z. (2015). New and not so new methods for assessing oral communication. *Language Value*, 7, 1–21. doi:10.6035/LanguageV.2015.7.2 Retrieved from http://lib.dr.iastate.edu/engl_pubs/74/
- 佐藤匡敏 (2017). 「ペア・グループワークの潜在力を引き出そう」『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』(pp. 89–105). 大修館書店